

ニュータウンのトポグラフィー

—向島ニュータウンと巨椋池の記憶をめぐる考察—

杉本 星子

要 約

ニュータウンは生活空間であるとともに住宅市場でもある。この市場の基盤となる都市の「トポグラフィー（地形）」は、土地や建物といった物質的なものと、それらに付与され、それらから読み取られる理念やイメージといった想像的なものからなる。それはまた、人びとの社会的行為や関係の遂行を通して産出され、維持され、改変されていく。本稿は、京都府南部に建設された向島ニュータウンのトポグラフィーが、かつてその立地に広がっていた巨椋池の土地の記憶を組み込みながら社会的に構築され、またそれがどのように変わりつつあるかを考察する事例研究である。

キーワード：ニュータウン、郊外、トポグラフィー、環境、文化資源

序 日本のニュータウン政策と住宅市場

郊外のニュータウンは、生活空間であるとともに、住宅という「商品」の物質的な諸要素とその理念やイメージ、とりわけ「中流の生活」が生産され購買される消費の場所に他ならない。ニュータウンを生きることは、商品としての世界を生きることでもある^(注1)。若林は、こうした郊外を「社会の地形」という視点から捉えようとした。彼のいう「社会の地形」とは、土地や建物といった物質的なものと、それらに付与され、それらから読み取られる理念やイメージといった想像的なものからなる。それはまた、人びとの社会的行為や関係の遂行を通して産出され、維持され、改変されていく^(注2)。特定の住宅市場における住宅の価格は、住宅の立地とりわけ住宅地の「社会の地形」に大きく依存する。本稿では、ニュータウンという空間を構成する物質的および社会的な地形を総合する言葉として、トポグラフィーという外来語をそのまま用いておきたい。とくに本稿で注目し

たいのは、ニュータウンに付与され、それらから読み取られる想像的なものの構築である。それは、ニュータウン建設以前の、さらには建設以後の、地域の自然と人びとの生活の営みの相互関係のなかで形成されてきた土地の記憶に強く依拠し、若林が述べるように常に遂行的に変化してゆくものである。

『住宅市場の社会経済学』を著したブルデューは、あらゆる実践はたとえ認識の必要性からそれを別様に取り扱わざるをえない時であっても、マルセル・モースの意味で『全体的社会的事実』と考えなければならない、と述べる。ブルデューは、従来、「経済学的」な実践の場として捉えられてきた住宅市場において、人びとの嗜好体系の生産を介した需要の構築や、法律や規則によって規定された建築や居住に対する国家的援助を介した需要の構築とともに、建築会社への融資による国家（または銀行）の政策を介した供給の構築といった国家の関与が決定的な役割を果たしていることを論じた^(注3)。ブルデューが対象としているのは主にフランスの一戸建て住宅市場ではあるが、日本

のニュータウンにおける住居の購入という「経済的」行為のうちにもまた、同様の需要の構築をとおして「社会的世界がまるごと現れている」^(注4)といえよう。

しかし、日本のニュータウン研究においては、ブルデューがフランスの住宅市場についておこなったような、「住」をめぐる官業と民業と消費者からなる住宅市場がいかに「社会的」に構築され構造化されているかを総合的に分析する経済人類学的な研究はほとんどなされてきてはならない。本稿は、そうした総合的な分析へ向けたひとつの試みとして、京都府南部の向島ニュータウンの「トポグラフィ（地形）」について検討し、ニュータウンという郊外の生活空間が、同時に住宅市場としていかに社会的に構築され構造化されているかを考察することを目指した事例研究である^(注5)。

1. 日本のニュータウンと郊外の二極化論

1955年に設立された日本住宅公団は、1981年には住宅・都市整備公団に、そして1999年には都市基盤整備公団となり、2004年に独立行政法人都市再生機構となった。西川はそこに見られる「住宅－住宅・都市－都市基盤－都市再生」というキーワードの変化に、住宅建設という使命を民間デベロッパーに譲り、公共事業としては都市の整備に向かうという国家の住宅政策の変化を読み取っている^(注6)。この変遷から明らかになるのは、戦後日本の住宅政策が、社会政策としてより経済政策として、とりわけ都市開発を旗印とした公共事業として進められてきたということである。都市開発は、住宅市場の開発と活性化という目的と分かちがたく結びついてきた。西川が指摘するように、「公団アパート－分譲マンション－建て売り分譲住宅－庭付き郊外一戸建て分譲宅地」という「住宅双六」は、ニュータウン建設の初めから一世帯一住宅をめざした国民住宅政策のうちに組み込まれていたのである。「住宅金融公庫」は住宅政策のみならず経済政策の執行機関である。1975年の勤労者財産形成促進法の改正によって、住宅は使用価値としての住まいではなく、財産つまり交換価値としての住宅として位置づけられた^(注7)。そし

てそれが、経済の高度成長期における分譲宅地ブームを牽引したのである。

すでに京都文教大学人間学研究所の共同研究「ニュータウンにおけるジェンダー変容」で報告したように、日本各地のニュータウンは、1970年代までの公団住宅の多くが標準設計に基づいて建設されたこともあって、よく似た外觀もつばかりでなく、日本型ともいえる特徴を共有し、共通の問題を抱えながらも、その立地条件と建設時期、建設モデルの違いによって、それぞれが独特の性格を有している。日本型ともいえる特徴とは、(1)生産活動は旧都市で再生産活動は新都市でという職住分離の原則、(2)共有空間と共同性をめぐる諸問題、(3)ニュータウン内の階層分離、(4)急激な高齢化と少子化、(5)多文化混淆社会化である^(注8)。さらに日本各地のニュータウンが建設後30年を迎えるなかで、郊外の二極化問題が浮上してきた。

日本の初期のニュータウンは、イギリスのガーデン・シティをモデルとした庭付きの戸建て住宅地、あるいは二、三階建ての鉄筋コンクリート製の低層集合住宅地であった。一般に団地と呼称された1960年代のニュータウンは、近代化や都市化による新しい時代の到来を視覚化する表象でもあった。ダイニング・キッチンや応接間のある団地の住戸は、サラリーマンの近代的なライフスタイルの象徴として人々の憧憬の的であった^(注9)。日本のニュータウン建設の歴史は1975年を契機に、2DKの団地からnLDKのニュータウンへ、すなわち一人一室型住宅という質を重視した住宅の供給へと大きく転換した。新たに建設された大規模ニュータウンの多くは、外来語の“ニュータウン”という言葉に冠した名称をもち、五階あるいは六階建ての集合住宅が並ぶゾーンと、多くの戸建て住宅が並ぶゾーンから構成された。住宅ローンの貸し付けによる不動産市場の拡大による内需拡大への期待を背景に「持ち家」願望が煽られ、郊外のニュータウンや民間デベロッパーが開発した新興分譲住宅地は、オシャレなトレンドイ・ドラマの舞台ともなった。しかし1991年のバブル崩壊後、地価は大きく下落した。1990年代後半以

降、住民の高齢化率は上昇し、ニュータウンのオールタウン化が語られるようになった^(注10)。コミックやアニメではしばしば、老朽化した住宅、空き住戸、住民の高齢化が描かれ、ニュータウンの犯罪や家族の崩壊、さらには破壊のファンタジーが繰り返し描かれるようになる^(注11)。それとともに、都市近郊のニュータウンは市場価値あるニュータウン、いわば「よい郊外」と、市場価値が暴落したニュータウン、いわば「わるい郊外」に分化していった^(注12)。ニュータウンの二極化を決定づける第一の要因は、いうまでもなく住環境の整備状況である。住環境の整備において、都市中心部と繋ぐ交通網や商業施設、病院、学校といったインフラの整備が重要であることはいうまでもない。それは、住宅価格や家賃、地価、そして新築住宅の住居者の応募状況に大きな影響を与える。とはいえ、ニュータウンの市場価値は必ずしも単純な物質的要素に還元され得ない。そこには、住宅地のイメージといった想像的な価値、すなわち住宅地の記号性・物語性も大きな影を落としている。

また、ニュータウンの住宅の老朽化に加え、1995年に、民間の住宅ローンが1961年に制度化されて以来初の大都市直下型地震である阪神大震災が起きて、「建て替え」問題が大きく浮上した。市場価値の高い「よい郊外」における分譲マンションの建て替え再生は、その負担を賄う余裕のない高齢者の排除を促した。一方、「わるい郊外」の住宅は、建て替え問題を解決できないままに老朽化し、いっそう住環境を悪化させて土地の市場価値を減少させてゆくことになった^(注13)。

2000年代に入り、小泉内閣のもとで進められた「都市再生」政策により、ニュータウン建設は終局を迎えた。「都市再生」政策は、大都市中心部の再開発と超高層化によって個人の金融資産を都市経済の活性化につなげることを目指している^(注14)。それによる人口の逆流と都市集中によって、郊外ニュータウンの勝ち組と負け組の格差はいっそう明確なものとなった。こうして、2003年から2004年にかけて「気がつけばオールタウン—千里ニュータウンに見る『栄枯盛衰』」(『週刊朝日』2003.6.27号)や「ニュータウン住みこなし時代」(読売新聞

2003年5月連載)、「あなたはまだ郊外にすむつもりですか？」(『サンデー毎日』2004.4.4.号)など、新聞や週刊誌上でたびたび郊外問題が取り上げられるようになった。

ニュータウン先進国では、早くから郊外の荒廃が問題となっていた。パリ近郊のニュータウンは、下層の労働者や移民労働者を吸収する受け皿となった。こうして形成された郊外は、中産階級向けの緑豊かな住宅地とは明らかに区別される^(注15)。アメリカでも、郊外の二極化はいっそう顕著になっている。郊外のロードサイドに大型商業施設が林立するとともに中心市街地は空洞化し、郊外の高級住宅地は高い壁で囲われセキュリティを強化することで要塞化した。一方、ワーキング・プアの暮らす郊外には荒廃した風景が広がる。三浦は、こうした郊外の荒廃を「ファスト風土化」と名付け、今や日本のニュータウンの二極化もまた、格差社会化の進行と絡みあいながら、アメリカを後追いするかのような荒涼とした郊外の風景を現出させつつあると懸念している^(注16)。東と北田は、ファスト風土化する郊外を「ジャスコ的郊外」、それに抗して高級住宅地としてのイメージを維持している郊外を住民の田園への憧憬に注目して「ロハスの郊外」とよぶ。そして、日本では高級住宅地の概念が崩壊し、あるのは地価の傾斜だけであって、住民のライフスタイルや文化資本と経済資本、そして住宅地の記号性・物語性の結びつきは、むしろ崩れてきているのではないかと論じている^(注17)。

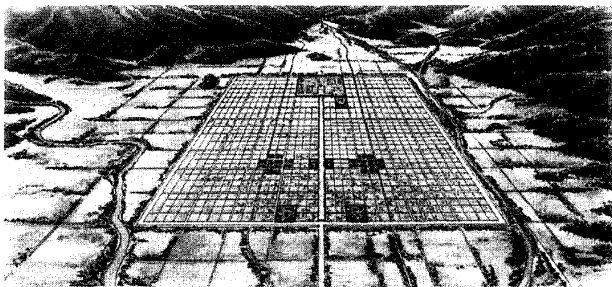
2. 京の「都」のトポグラフィーとニュータウンの建設

日本各地のニュータウンには、(1)ニュータウン形成以前のトポグラフィー、すなわち、当該地域の地理的な地形と土地にまつわる伝承などによって形作られた社会的な地形、(2)欧米から導入されたニュータウン・モデルのトポグラフィー、そして(3)そのモデルを日本の住宅政策に合わせて再解釈して実現された新たな地理的および社会的な地形という、少なくとも三重のトポグラフィーが重層している。

たとえば東京都西部の多摩ニュータウンの開

発は、江戸-東京という都市のトポグラフィのうえに展開している。東京23区は、あきらかに東のブルーカラー地帯と西のホワイトカラー地帯に色分けされる(注18)。人びとのライフスタイルと居住地域は、あきらかに連動しており、それが東京の住宅市場における宅地価格の東西格差の背景となっている。多摩ニュータウンは、江戸時代に山の手とよばれた江戸の西部の「お屋敷町」の地形に連なる多摩川の西の丘陵地帯一帯の山林を開発して建設された。そこに、日本住宅公団や大手デベロッパーによって欧米の田園都市型ニュータウンのモデルが導入され、オシャレでモダンな「郊外」という住宅市場が発展した。こうした多摩ニュータウンの都市計画と町の発展は、東京の東西格差を再生産するものとなっている(注19)。

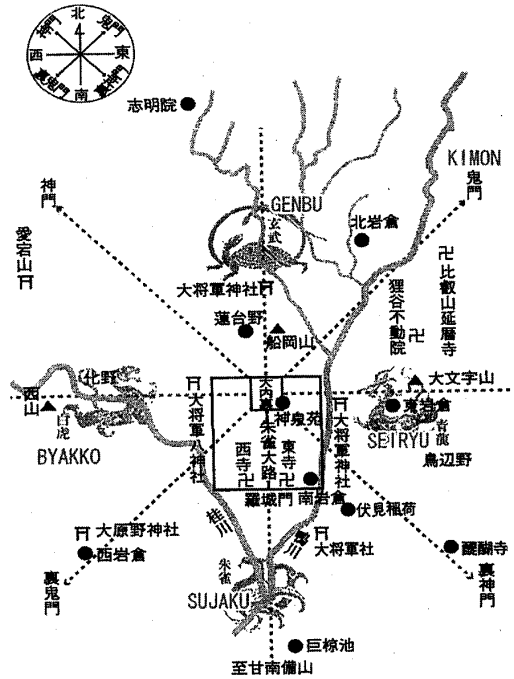
さて、京都のニュータウンはどうであろう。そもそも京都は、京都盆地に中国の都モデルが導入され、御所を中心とする整然とした都市計画のもとに建設された古い都である(地図1)。京の「都」が陰陽五行説による「四神相応の地」としての世界を具現する構造をもつことは、しばしば論じられてきた(地図2)。この街の都市構造は、現実の敵から住民を守るというよりは、むしろ超自然的な力によって引き起こされる災厄や、都市が無意識的に造り出す邪悪から、都人ひいては国家を守るために作られている。



地図1「平安建都 2000年記念 甦る平安京」
(京都市 2005: 1)

高石は京都の街を心の世界として捉え、この都市が、桓武天皇が平安京を造営するときにもくろんだ強迫性を柔軟に取り込むプロセスを経るなかで、「無意識」や「魔」や「死」といった妖しいものとの接点を用意することにより、

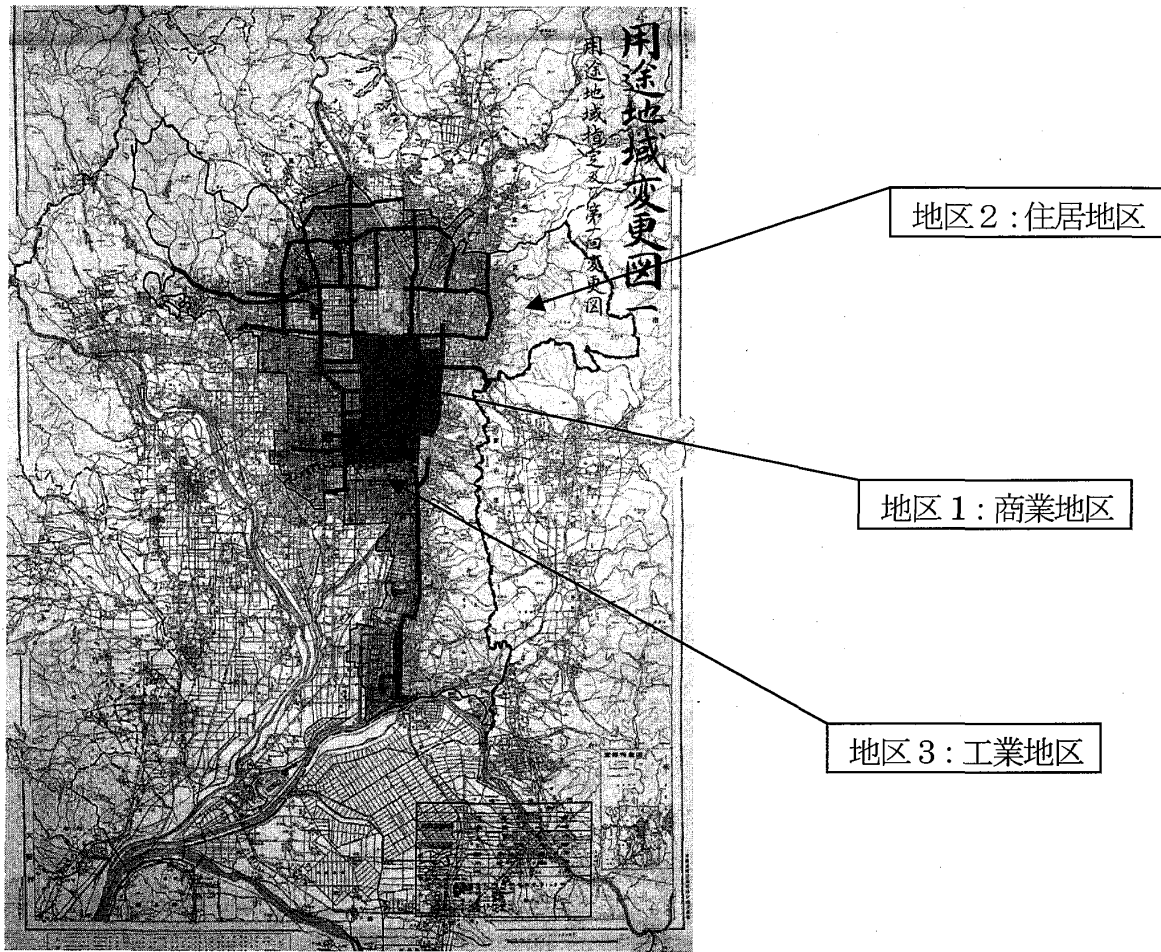
千年の歴史の重みを支えるだけの深みや工夫に満ちた世界を維持してきたのではないかと述べて、縦横斜めに配置された魔の調伏の仕掛けについて論じている(注20)。



地図2 (高石 2003: 187)

京都の街の中心軸は、御所が北東に移転したことにより、東に移動した。しかし、都の構造自体に大きな変化はなく、御所の周囲と東・北に公家屋敷が、御所の南や西に町衆が暮らす商業地域が広がり、それを囲んで東・北・西の山際には寺院、南には巨椋池が広がっていた。その後、明治維新による東京遷都と近代の都市整備により、京都の景観は変化した。しかし近代京都の都市計画もまた、長い歴史の中で育まれた都の構造を基盤に構築された。

第一次大戦後(1915)、急速な工業化と都市への人口集中による都市中心部の過密が問題となった。1919年、都市計画法及び市街地建築物法が制定され、1922年に都市計画区域が指定された。以下の地図は同計画の第一回変更図(1924年)であるが、ここに見られるように、京都中心部の都市計画では、商業地区(地区1)を中心に、北部と東部の山側に住居地区(地区2)、南東部の低地には工業地区(地区3)が広がっている(地図3)。



地図3 1924年用途地域指定図と第一回変更図（京都市 2005: 7）

さらに、戦後、1955年以降の経済の高度成長に伴う人口、産業、財政投資の大都市集中がもたらした京都市内の過密状況を解消するため、市街地開発事業の一環として大規模ニュータウンの建設が計画された。1969年に、京都南西部の西京区大枝・大原野地区の山麓に広がるタケノコ栽培に適した優良農地を開発し、京都初のニュータウンである洛西ニュータウンを建設する事業計画が決定された^(注21)。同じ年、京都市は1985年を目標とする「まちづくり構想」を策定した。そこでは、(1)盆地平坦部を市街地に、(2)都心の機能純化、(3)生産流通機能は南部に、(4)伝統産業地区の整備、(5)住宅地は山沿いに、という基本方針が提示された。洛西ニュータウンは、自然の景観を有効に利用し、公園緑地をできるだけ多くとり、点在する古墳などの文化財も取り入れた歴史的風土と緑豊かな住環境を目指すニュータウ

ンである。同じ頃、急増する都市人口の受け皿として巨椋池干拓地向島ニュータウンが計画された^(注22)。向島の土地のイメージは、度重なる宇治川の氾濫による水害や巨椋池の水質の悪化による悪臭とマラリア蚊の発生による風土病の蔓延という、干拓以前の巨椋池の負の記憶におうところが大きい。そこに1968年の都市計画法による都市開発計画の一環として、ニュータウン建設が計画されたのである。

ここで注目しておきたいのは、第一に、京都で最初の二つのニュータウンが、いずれも1924年の用途地域指定図に示された北部の住宅地区の延長線上にではなく、南西部の工業地域の延長線上に計画されたことである。京都の南西部と南部における大衆向けの巨大ニュータウンの建設によって、古くからの住宅地である御所の北側から北大路にかけてと、東山の山裾の住宅地は、相対的に裕福な人びとが多く暮らす高級

住宅地としてのイメージをいっそう強めることになった。第二に注目したいのは、洛西と向島の二つのニュータウンはいずれも、土地の風景を大きく変える近代的な建築群の建設とそこにおけるモダンなライフスタイルを提案するものであったことである。そして第三に、この二つのニュータウンが同時期に開発されながら、母体となる政策自体を異にしていたことである。洛西ニュータウンは、京都と古都「長岡京」を結ぶ方角にある山麓の優良農地に、市街地開発事業による田園都市型郊外をモデルとしたニュータウンとして建設されたのに対して、南の向島ニュータウンは、旧巨椋池干拓地に、都市開発型郊外をモデルとしたニュータウンとして建設された。田園都市型郊外とは、イギリスのエベネッツァー＝ハワード (Ebenezer Howard) が唱えた『田園都市』構想の系譜をひく都市計画による、公共の広場とゆったりとした緑の多いオープンスペースがある郊外住宅地である。都市開発型郊外とは、工場誘致と組み合わせられた職住近接型の郊外住宅地である。

洛西と向島の二つのニュータウンは同時期に住居者を募集したが、応募広告で強調されたニュータウン・イメージも同じではない。昭和50年から56年にかけて、京都市住宅供給公社が出した入居者募集パンフレットの言葉を拾ってみよう。

洛西ニュータウンのパンフレットに並んでいるのは、以下のような言葉である。「さわやかな緑のなかに理想の街づくりをめざす洛西ニュータウン」「美しい水と緑のニュータウンに待望のマイホームを」「保育所・幼稚園から小・中・高校まで教育環境もますます充実」「安心して快適な毎日をお約束する医療・公共サービス機関」「毎日のお買い物は豊富な品揃えのサブセンターで」「気分爽快な汗をご家族みんなで流しませんか」「充実した設備と入念な仕上げはぜひ現地でごらん下さい」「住む誇りと喜びを感じる街」。洛西ニュータウンで強調されているのは、ニュータウンの内外に残る自然の水と緑、暮らしの質、安心、快適、そしてそこに住むことへの誇りである。

これに対して、向島ニュータウンのパンフ

レットには、以下のような謳い文句が並んでいる（（）内は筆者の補足）。「空の広さが印象的 古都京都に誕生する新しいまち 向島ニュータウン」「大きな街に大きな暮らし」「多彩な街並みのなかにひろがるクオリティ・ライフ」「便利です 楽しいです ハッピーな街です」「（近鉄新駅が）完成すると京都・大阪方面への通勤通学時間は大きく短縮されます」「将来性豊かな住環境」「緑（公園緑地）の中の静かな教育環境」「医療施設の充実をはかります」「光と緑のニュータウン」「住みやすさ本位の居住空間」「ゆとりと暮らしやすさをテーマに日々充実するまちづくり」「日を追って便利になる暮らしの施設」「憩いのスペースをふんだんにとったレイアウト」「ほっと一息つけるゆとりの住まい」「“お湯と暖房”のある快適な暮らしをおとどけます」。向島ニュータウンで強調されているのは、新しい町の利便性、生活のゆとりと住みやすさ、そして将来性である。

しばしば語られるように、ニュータウン建設は土地の風景をリセットする。しかし、それによって人びとのもつ土地の記憶が完全にリセットされるわけではない。古代の遺跡が点在し長岡京や桂といった古都につながる西南部地域一帯と、巨大な沼地であった巨椋池の干拓後に造成された南部地域一帯の、ニュータウン建設前に遡る土地の記憶は、大きく異なっていた。洛西ニュータウンと向島ニュータウンの開発計画のうちに、そうした土地の記憶が忍び込み、建設計画案の策定や導入されるニュータウン・モデルの選択に影響を与えなかったとはいえないだろう。そしてまた、導入されたニュータウンの原型イメージは実現されるニュータウンのトポグラフィーのうちに潜み、その発展を方向づけてゆく。さらに建設されたニュータウンが、人びとの心の中で対比され語られることによって、人々の居住選択に無意識的あるいは意識的に影響を与える。こうして、それぞれのニュータウン独自のトポグラフィーが構築されてゆく。

京都市は、1999年に21世紀の京都のまちづくりの基本方針を定め、2001年に基本構想を具体

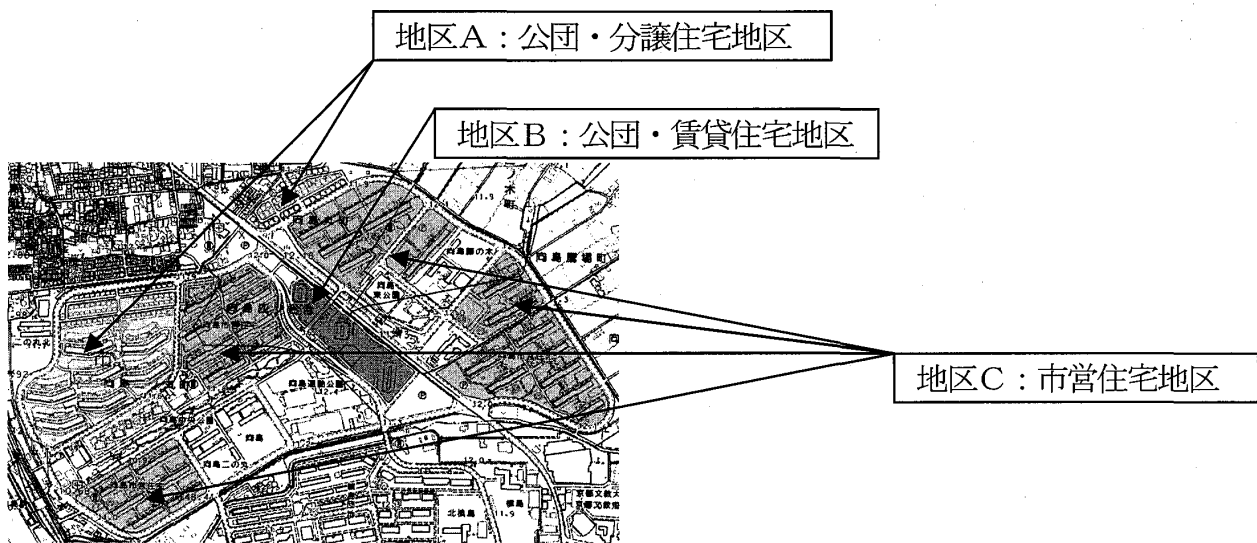
化するための京都市基本計画として、「保全・再生・創造」からなる都市構造イメージを提示した。それによると京都市は南北軸で三分され、北部は「自然・歴史的景観と居住環境の保全地域」、中心部は「調和を基調としたまちの再生地域」、そして南部は「創造のまちづくり地域」とされる^(注23)。京都市南部の郊外に建設された向島ニュータウンは、明らかに南部の工場労働者のための職住接近型ニュータウンという性格を付与されている。京都のニュータウンの住宅市場は、京都市が策定したこのような都市構造のイメージや、そこにおける住宅地イメージの相互の関係性のなかで格付けされているのである。

3. 向島ニュータウンのトポグラフィーと文化資源としての巨椋池

向島ニュータウンは、宇治川南岸の巨椋池干拓地（約75ヘクタール）に、土地の高度利用を図りつつ、遊歩道や公園などのある緑豊かなニュータウンを目指して計画された。宅地開発は京都市住宅供給公社が担当し、京都市、住宅公団、公社によって住宅建設事業が進められた。向島ニュータウンを縦断する国道24号線沿いには、大型量販店やショッピングセンター、ファミリーレストランやファーストフード・ショップが点在し、東のいう「ジャスコ的郊外」の風景が続いている。ニュータウンの建設

は、巨椋池干拓地の広大な水田地帯の一面に周囲から浮き上がった巨大な高層住宅群が屹立する街の風景と、在地の農民とはライフスタイルが異なる都市のサラリーマン人口の大量の流入をもたらした。在地の人びととニュータウンの人びとが交わる空間は、わずかに小学校しかない。こうして現在に至るまで、ニュータウンの人びとの生活空間と在地の人びとの生活空間は、隣接しながらも別世界でありつづけてきた。ニュータウンの住民と在地の農民のあいだには、ほとんど土地の記憶は共有されていない。その一方で、ニュータウンの建設から30年の時を経て、「団地っ子」とよばれる団地生まれの世代がニュータウンに戻ってくる時代になった。ニュータウンの周囲の農村もほとんどが兼業農家となり、子どもたちの多くはサラリーマンとなった。ニュータウンのある風景はすでに新しい風景ではなく、むしろ人びとの原風景となりつつある。

現在の向島ニュータウンは、大きく3つの居住地区からなる（地図4）。地区Aは、住宅公団が建設した分譲住宅地である。地区Bは住宅供給公社が建設し公団が管理を引き継いだ賃貸住宅地である。そして地区Cは、京都市が管理する市営住宅地である。住宅の建設・管理団体の違いや、分譲と賃貸の違いは、住宅や住棟建築の形や施設の管理状況の違いによって明確に識別される。それはそのまま、住民の社会的な階



地図4 向島ニュータウン

層のちがいを視覚化する結果となっている。こうして、ニュータウンの内部に、住戸やそれを取り巻く緑地の維持管理が行き届いた地区と、維持管理が行き届かず荒んだ雰囲気のある地区が生じるようになった。

日本住宅公団が分譲した住宅地区（地区A）は、テラスハウス地区と高層住宅地区からなる。建設から30年を経てテラスハウスの庭木は茂り、多くの住宅が台所やガレージを建て増して住みこなしている。高層住宅地区の共有地の庭木の管理や清掃は業者に委託され、芝生やグリーンはきれいに維持されている。一方、京都市が管理する市営住宅地区（地区C）は、京都市の福祉政策の対象となる低所得者や高齢者、中国からの帰国者に向けた福祉住宅地区としての性格をもつ。1996年に京都市が制定した公共住宅法によって、市営住宅に住む高収入の入居者には家賃に上乗せして負担金が課せられることになった。この法律によって、ニュータウンに長年暮らしてきたにもかかわらず、退去を余儀なくされた住民も多く、空き住戸がめだっている。残された住民たちは経済的にも体力的にも余力がなく、共有地の管理や清掃を協働するための相互扶助関係を維持するのは難しい。駐車場の不足もあって路上駐車禁止は有名無実となっている。そうした雑然とした風景が、廃車を含めた粗大ゴミの路上投棄を招き、それがひいてはニュータウン全体のイメージに反映されている。

向島ニュータウンの南側には道を一本隔てて、公団が建設した分譲および賃貸の集合住宅棟が並ぶグリーントウン榎島が建設されている。グリーントウン榎島は、行政的には宇治市に入る。しかし、向島ニュータウンとグリーントウン榎島は地理的に連続し、全体がひとつのニュータウンであるかのような景観をなしている。向島ニュータウンや榎島グリーントウンでおこなったライフヒストリーの聞き取り調査の結果、「公団住み替え組」（日本各地の公団を転居）が少なからずいること、向島ニュータウンから榎島グリーントウンへの移動や賃貸地区から分譲地区への移動といったニュータウン内部での住戸の移動や、戸建て住宅からニュータ

ウンへの回帰、親子が同じニュータウンあるいは隣接したニュータウンの別棟やニュータウンに近い住宅地に暮らすといった事例が認められた^(註24)。ニュータウンは住戸面積の狭さという物理的な要因により核家族化を促進したが、それによって子どもが独立した後の親子関係が切断されるわけではない。老夫婦は子ども夫婦の家族と別居しながらも、いざというときに互いに駆けつけられる場所に居住できることが望ましいと考えられている。また共稼ぎの子ども夫婦にとっても、親に子育て支援をしてもらえる距離に住居をもつことは望ましい。こうしたネットワーク家族ともいえる家族関係をもつ人びとにとって、向島ニュータウンや榎島グリーントウンのように、京都へも大阪へも通勤可能な立地条件にあり、住戸数が多く住戸の形態にもバリエーションが多いニュータウンやニュータウンの周辺に広がる住宅街は、むしろ適切な住環境だといえることができる。ニュータウン内の商店街はかなり空洞化しているとはいえスーパーマーケットもあり、歩ける範囲あるいは自転車での行動範囲内に郵便局や銀行などがあり、生活に必要な最低限の店舗や医療施設は残っている。ニュータウン内やそれに隣接する住宅街には、書道などの趣味の教室や家庭菜園もあり、公園や散歩道、公共のテニスコート、保育園や幼稚園、介護施設などもある。子育て世代と老夫婦の日常生活に大きな支障はない。また、向島ニュータウンは巨椋池干拓地に開発された工業地域に隣接しているため、子育てが一段落した主婦のパート雇用を供給する工場などもある。住環境が災害や犯罪から守られてさえいれば、ニュータウンの住み心地は必ずしも悪くないのである。ただし問題はこの安全性である。治安の不安は、しっかりと地域組織を欠いた郊外が抱える共通の問題の一つである。

そもそも向島ニュータウンのイメージには、宇治川の氾濫を防ぐ防災工事のために水質が悪化して沼地化した巨大な池の負の記憶がまといついていた。しかし、歴史をさらに遡ってみれば、京都南部地域のトポグラフィは、京都の街の経済発展とともに大きく変化してきたことがわかる。古代から中世にかけて、この地域

は木津川、宇治川、桂川が合流し、巨大な入り江のような水辺をなしており、大小さまざまな島や中州があった。向島という地名も、ここが中州のひとつであったことを示している。京都の南に広がるこの水辺は河川交通の要所であるとともに、豊かな漁場であり、また都の防衛上も重要な地域であった。向島ニュータウンの中には今も二の丸という地名が残っているが、それは戦国時代、ここに出城がつけられていたことによる。巨椋池は、太閤秀吉の大規模土木工事によって大きく姿を変えた。秀吉は都の南、巨椋池を見渡す伏見に城を築き、淀川船運の拠点を掌握し、中州を繋いで堤を建設して宇治川の流れをひとつにまとめた。巨椋池の景観が次に大きく変わったのは、明治初年から始まった水害防止のための河川改修工事による。明治43年（1910年）に巨椋池が宇治川と分離し巨大な浅い淡水池となったが、その後、周辺地域の生活排水や農業排水が流れ込み、汚泥の堆積が進み水質が極端に悪化した。こうして、巨椋池の豊かな漁業資源や美しい蓮池の風景は失われていった。巨椋池の負のイメージは、このように近代化がすすむなかで産み出されたのである。

昭和4年（1929年）に巨椋池の干拓予算が承認された。昭和8年（1933年）から昭和16年（1940年）にかけて排水工事が進められ、634ヘクタールにおよぶ新耕地の造成と1660ヘクタールの周辺耕地の区画整理が完成した。しかし昭和28年（1953年）、台風13号による集中豪雨で宇治川が決壊し、大水害が起きた。その後、宇治川治水計画が進められ、昭和39年（1964年）に上流に天ヶ瀬ダムが完成して以来、水害の被害はなくなった^{（注25）}。こうして巨椋池干拓地は住宅地として開発できる安全な土地となった。しかし、在地の人びとにとって、水害の記憶とかつて池の底であったという地盤への不安はなかなか払拭できなかった。また、巨椋池の田畑は豊かな緑に彩られているとはいえ、巨椋池の用水路には生活排水が流れている。最近、用水路や畦道への粗大ゴミの不法投棄が大きな問題となっている。

近年、巨椋池干拓地と周辺地域の市街化が進み水路への流水が増えたことから、農地冠水が

懸念されるようになった。そこで新しい巨椋池排水機場が造られるとともに、改めて地域の防災と環境問題が見直されている。また、今は用水路に生活排水も流れ込んでいるが、宇治市の下水工事の完成が近づいており、将来的には用水路には浄化された水が流れるようになると見込みまれている。2006年には、農林水産省近畿農政局巨椋池農地防災事業所を中心に、関係諸機関が「巨椋池まるごとミュージアム」として連携をとり、巨椋池の防災、歴史、自然、農業に関するさまざまな住民参加型イベントをおこなった^{（注26）}。NHKの大河ドラマの舞台ともなった槇島城跡に地域の郷土史家の人びとが顕彰碑を建立し、宇治市のボランティアガイドのお年寄りたちが、宇治川から巨椋池にかけて点在する歴史景勝地をめぐる散策コースを提案している。巨椋池干拓地は大都市近郊に残された広大な農地であるとともに、さまざまな植物や鳥が生きる自然の残る土地として、土地と農村の交流の場、観光農業の場という新しい意味を持ち始めている^{（注27）}。

巨椋池をめぐる社会環境のこのような変化のもとで、近代化以降、京都南部の住宅市場の構築においてほとんど無視され、むしろマイナス要因とされてきた巨椋池干拓地が、地域の自然・文化資源として再評価されつつある。それによって、向島ニュータウンのトポグラフィーはどのように変化してゆくのであろうか。また、自然保護や地産地消の実現のために、これまでほとんど生活空間を共有することがなかった在地の農民とニュータウンの住民が、巨椋池という地域資源を媒介として交流をもとうとする活動も始まっている。向島ニュータウンは、長い目で見た場合、巨椋池干拓地の自然・田園景観を生活空間のうちに取り込むことによって、住宅市場の価値をあげる可能性を秘めているといえよう。

結び ニュータウンと地域の文化資源

ニュータウンの開発には、広大な土地が必要である。大都市近郊に残る開発可能な広大な土地は、戦前の軍部の保有地であったり、墓地であったり、埋め立て地であったり、あるいは向

島ニュータウンのように河川氾濫による水害危険地域であったりすることが多い。こうしたニュータウン以前の土地の記憶は、在地の人びととニュータウンの住民とのあいだに微妙な影をおとしているように思われる。しかし、土地の記憶とは、人びとのコミュニケーションのなかで、ある出来事や経験が意味づけられ、なんらかの機会に再び想起され語られ、そのたびに改めて生成される土地の「過去」である。岩本が指摘するように、民俗学にしても人類学にしても、文化が無意識的に伝承されることを前提としてきたが、現代は伝承が伝承として意識され、意図的に記憶を作り上げる時代である(注28)。土地の「記憶」とそれがもたらす土地のイメージは変わりうる。

現在、京都市は長期的な展望にたって「都市格をあげる」ことを目指し、「古都」の豊かな自然と歴史的な記憶を想起させる景観を保持する「眺望景観創世条例」を制定しようとしている。都市格の向上によって、街の経済的な活力、観光事業の集客、そして住宅市場の動向へのプラス効果が期待されている。都市格とは、多分に想像的なものに支えられた街のブランド価値にほかならない。また、近年、多摩ニュータウンや千里ニュータウンなど各地のニュータウンで、住民たちがまちづくり活動を始めている(注29)。そうした活動は単にオールドタウン化や「ジャスコ化」に抗し、快適な住環境づくりを目指しているのではない。住むことに誇りをもてる街づくりをすることによって、ニュータウンの都市格を維持し、住民アイデンティティを確立しようとするものである。まちづくり活動では、かつては宅地開発の対象あるいはニュータウンの借景にすぎなかった地域の自然や、これまでニュータウンの人びとが無知あるいは無関心であった地域の歴史が、改めて地域の資源として見直されている。自然は、いわゆる自然資源というよりはむしろ、現代の都市住民が希求するロハス的なライフスタイルの幻想を喚起して人びとを結びつける媒体という文化資源としての意味を強めている。住民がこうした地域の資源を活用してニュータウンの都市格を維持あるいは向上できるか、それ以前にそも

そも地域の資源を活用するだけの社会関係、すなわち社会的な「体力」があるのかによって、それぞれのニュータウンのトポグラフィーは変容してゆくことになる。

ニュータウンは近代が凝縮した社会空間である。それゆえ、そこには常に社会の一步先をいく現象が現れるといわれる。日本社会における格差の拡大は、郊外ニュータウンの二極化を加速してゆくのだろうか。あるいはニュータウンという空間における新しい動きとして、「ジャスコ化」と「ロハス化」が相互浸透しながら、そこに住宅の記号性・物語性の新しい様相が立ち上がってくるのではないだろうか。ニュータウンの住宅市場は、それによって大きく変わってゆくものと考えられる。

<注>

1. 内田 2002: 371; 若林 2003: 16-168.
2. 若林 2003: 121-122, 135.
3. ブルデュー 2006: 11.
4. ブルデュー 2006: 13.
5. 本稿は、2005年8月の第8回アジア都市化学会における発表「Good Suburbs and Bad Suburbs in Japan: a Case Study of the Topography and Images of “New-towns” in Kyoto」(『The 8th Asian Urbanization Conference』20-23 Aug., 於: 流通経済大学)で指摘した京都府の都市計画とニュータウン建設のトポグラフィー(地理的・社会的地形)についての考察を出発点とし、京都南部の巨椋池干拓地の歴史と現状についての資料を補足して、向島ニュータウンの事例研究を発展させたものである。
6. 西川 2004: 169-170.
7. 西川 2004: 150-157.
8. 西川、杉本、森 2002: 80-82.
9. こうした新中間層が暮らすニュータウン・イメージを背景に、日活ロマンポルノ「団地妻」シリーズが人気を博した。ニュータウンのイメージとその変遷については、2004年7月の第38回日本文化人類学会において「表象されるニュータウン：『団地妻 / しのび逢い』を中心に」(第38回日本文化人類学会、

於：東京外国語大学）と題して発表したほか、平成13年度～平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書『ニュータウンにおけるジェンダー変容』所収論文「表象都市ニュータウン」において論じた。

10. 福原 1998: 92-98.
11. 杉本 2004: 67-69
12. 「よい郊外」・「わるい郊外」という言葉は社会的には適切な表現ではないかもしれないが、こうした言葉や概念はフランスのニュータウン問題をめぐる議論でも用いられており、ここでは郊外の二極化イメージを表すために便宜的に用いておく。
13. 松原 2005: 154-158.
14. 松原 2005: 142-146.
15. 2005年11月、移民2世、3世の若者たちを中心とした暴動は、パリ郊外のニュータウンから始まった。
16. 三浦 2006: 12-13.
17. 東・北田 2007: 98, 134-137, 163-164.
18. 東・北田 2007: 140.
19. 若林 1998: 121-122.
20. 高石 2003.
21. 日本住宅建築学会 1999: 133-134、京都市 2005: 56.
22. 京都市 2005: 15-16.
23. 京都市 2005: 15-16.
24. 杉本 2004: 71-72.
25. 宇治市歴史資料館 2003.
26. 関係諸機関とは、①近畿農政局、②京都府、③京都市、宇治市、久御山町、④巨椋池地区国営事業推進協議会、⑤京都府土地改良事業連合会、⑥巨椋池土地改良区、⑦巨椋池干拓地環境保全ワークショップ、⑧巨椋池歴史資源検討委員会、⑨近畿地方整備局、同志社大学文化情報部、京都文教大学人類学科、J A 京都中央、巨椋池干拓地環境保全ワークショップ、宇治市観光協会、久御山町郷土史会、東一口自治会などである。
27. 近畿農政局巨椋池農地防災事業所 2006: 7-8.
28. 岩本 2003: 3-9.
29. 福原 2001: 92-131.

<参考文献>

岩本通弥

2003年「総論方法としての記憶—民俗学におけるその位相と可能性」『現代民俗誌の地平3 記憶』岩本通弥編、朝倉書店、pp.1-13.

内田隆三

2002年『国土論』、筑摩書房。

e-FLAGS (NPO法人)

2006年『実りの大地 京都巨椋池』。

宇治市歴史資料館

2003年『おぐら池—入り江、大池、巨椋池』。

京都市 都市計画局都市企画部都市計画課

2005年『京都の都市計画』。

杉本星子

2004年「表象都市ニュータウン」、平成13年度～平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書『ニュータウンにおけるジェンダー変容』（研究代表者：西川祐子）、pp.60-76.

高石浩一

2003年「魔のおさめどころ」、『京都フィールドワークのススメ：あるく、みる、さく、よむ』鶴飼正樹・高石浩一・西川裕子編、昭和堂、pp.186-195.

西川祐子、杉本星子、森正美

2003年『「ニュータウンの人類学」の可能性』、『人間・文化・心』京都文教大学人間学部研究報告 第五集、pp.65-85.

西川祐子

2004年『住まいと家族をめぐる物語—男の家、女の家、性別のない部屋』、集英社新書。

日本建築学会 近畿支部住宅部会「関西の住宅地編集委員会」編

1999年「洛西ニュータウン—京都で初めてのニュータウン」、『関西の住宅地』、日本建築学会 近畿支部住宅部会、pp. 133-136.

ブルデュー、ピエール

2006年『住宅市場の社会経済学』山田鋭夫・渡辺純子訳、藤原書店

福原正弘

1998年『ニュータウンは今—40年目の夢と現実』、東京新聞出版社。

福原正弘

2001年『甦れニュータウン—交流による再生を求めて』、古今書院。

松原隆一郎

2005年『分断される経済—バブルと不況が共存する時代』、NHKブックス。

三浦展（編著）

2006年『下流同盟—格差社会とファスト風土』、朝日新書。

若林幹夫

2003年『都市への／からの視線』、青弓社。

Abstract

The Topography of New-towns :
A Case Study of the Construction of Housing Market of
Mukaijima New-town bound up with the Memories of Oguraike

The object of this paper is to consider the significance of the construction of the space of new-towns not only as living space but also as housing market. We can not ignore that new-towns in suburbs are places for consumption of "goods", such as plots and buildings, and, at the same time, for consumption of life-style images of "the middle class". The market price of a new-town is based mainly on the topography constructed of physical and imagined aspects. The topography of a new-town is created, retained and altered through interrelations between natural conditions and human activities, mainly led by the policy making of local administrations. The topography is affected greatly by the socio-economic situation at the time and by images of the land and its inhabitants arising out of the history. This paper is a case study of the construction of the housing market of Mukaijima Newtown, whose topography has been accompanied by negative images of a large swamp named Oguraike, which no longer exists, situated in the south of Kyoto City.

Keywords: New-town, Suburbs, Topography, Environment, Cultural Capital